

母親の自閉傾向と出生転帰

—子どもの健康と環境に関する全国調査—

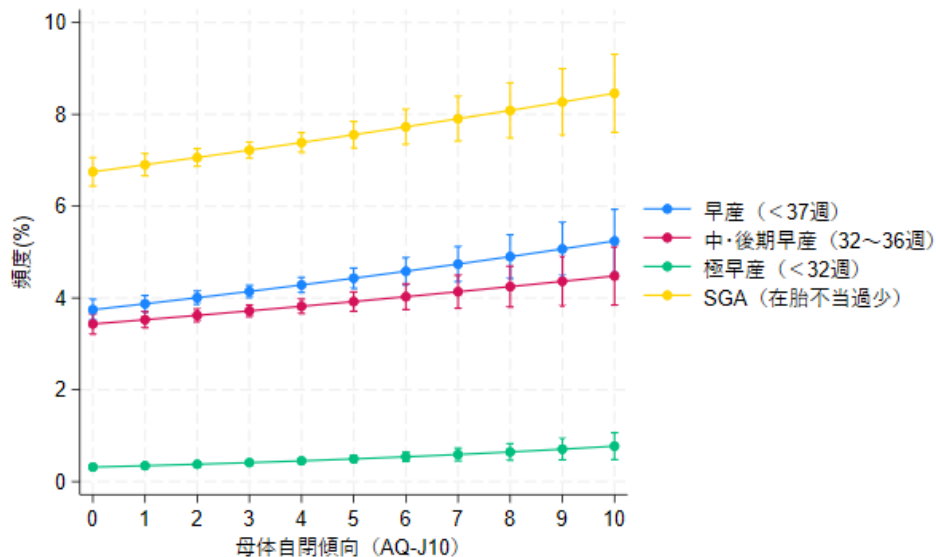
細澤麻里子

自閉傾向の高い女性は、妊娠中に様々な健康に関する問題を経験しやすく、出生転帰に影響を及ぼす可能性があります。今回、一般集団における母体の自閉傾向と出生転帰との関連を検討し、専門誌 (JAMA Network Open. 2024;7:e2352809) に発表しました。

エコチル調査に参加中の単胎児の母親を対象に、自閉傾向は妊娠第2・3期に自己申告による自閉症スペクトラム指数日本語版の回答で7点以上を臨床閾内と定義しました。出生転帰は、早産 (37週未満) およびSGA (在胎不当過少) とし、医療記録より収集し、一般化線形モデルを用いて相対リスクを求めました。妊娠週数群別 (極早産: 32週未満、中・後期早産: 32~36週) の分析も行いました。

対象 87,687 名のうち 2,350 名 (2.7%) が臨床閾内の得点でしたが、自閉スペクトラム症の診断を受けたのは 18 名 (0.02%) でした。母親の自閉傾向の得点が高まるほど、早産やSGAの頻度が高くなりました (下図)。

例えば、母体自閉傾向が1標準偏差増えるごとに早産 (1.06, 95%CI 1.03-1.09)、中・後期早産 (1.05, 95%CI 1.01-1.08)、極早産 (1.16, 95%CI 1.06-1.26)、SGA (1.04, 95%CI 1.01-1.06) の相対リスクが上昇しました。また、臨床閾内の女性 (7点以上) は、閾下の女性と比べて、早産のリスクが16%、中・後期早産のリスクが12%、極早産のリスクが49%、SGAのリスクが11%それぞれ高くなりました。



本研究では、自閉スペクトラム症の診断の有無によらず、自閉傾向が高い女性は、早産やSGA、特に極早産のリスクが高いことが示されました。この背景には、例えば、妊娠中の心理的ストレスの影響、食事など生活習慣の影響、また、困り事があっても支援につながりにくい等の影響が考えられます。この研究の限界点として、自閉傾向は自己申告に基づくことから、回答バイアスの可能性や自閉スペクトラム症とは異なる理由による社会性の困難さを反映している可能性があげられます。

医師からの自閉スペクトラム症の診断の有無にかかわらず、自閉傾向が高い女性（特に臨床閾内の得点を示す女性）に対し、妊娠中から適切な支援を提供していくことが重要です。